あってはならぬこと

川崎ゆきお

「あってはならぬことじゃ」
　絞り出すような声だが、高い。眉間の皺、鋭い眼光。その瞳の奥には人生の経験が奥深く沈んでいる。
「出しましたねえ」
「ああ、出した」
　久しぶりにこの老人「あってはならぬことじゃ」と得意のフレーズを口にした。たったそれだけの言葉だが、疲れたようだ。普段とは違う声で、違う発声法になるためか。
「少し絞りすぎたようじゃ」
「声をですか」
「しわがれ声にしたかったのじゃがな」
　以前もこの老人「あってはならぬことじゃ」と言ってから、しばらく寝込んだ。
　あってはならないことなので、始終起こることではない。それなら有り得ることだ。だから有り得ないことが起こったのだろう。前回から三年目のことだ。
　三年前のその前は四年前。平均すると四年に一度。オリンピックと同じ。だからよくあることなのかもしれない。
　村は山に囲まれている。その中で一番近い三角の山があり、ここだけは入らずの山となっている。この山だけが色目が違う。植林ではなく、原生林のままのためだ。枯れるべき木は枯れ、伸びる木は枝を伸ばす。下草もそうだ。ここではススキや笹が多い。
　要するに四年に一度、この入らずの山に人が入り込むことがある。村人は一切立ち入らない。これは子供の頃から言い聞かされているためだ。三角山の頂上付近に石組みの祠がある。それは何百年も前のもので、そこに神様を祭った後、誰も入れないようになっている。何等かの封印かもしれない。
　あってはならないこととは、そのタブーを犯したハイカーが登ったためだ。
　そして、下山はなく、姿を消している。
　山に入る行為はあってはならない行為だが、行方が分からなくなったのだから、有り得た話だ。つまり、神罰が当たったのだ。これは有り得ると言った方がいい。
　もし普通に下りてきたのなら、有り得ない話になるかもしれない。神山ではなかったのだ。普通の山と同じになる。やはり、ここは何か祟りとか災いとかがハイカーに起こった方が好ましい。その方が神山らしい。
　小さな山なので遭難は有り得ない。たとえそうだったとしても助けにいけない。入らずの山のためだ。タブーを破ってしまう。
「白骨がまた増えるかもしれぬ」

四日目、戻らないハイカーに対し、老人は、またしわがれ声で語る。

今回は下山した形跡がない。そのため、御山には白骨死体があるとみている。

しかし遭難届けはなく、家族も探しに来ないので、戻っているのだろう。

何故なら、三角山の登り道は一つだが、道などなくても山には出入りできる。

また、三角山の登り口から出て来た例もある。これはいつの間にか三角山に迷い込んだハイカーがいたのだろう。

村人には入らずの山だが、余所者にはそのタブーはない。

入山はタブーだが、下山はタブーではないかもしれないが、そういう決めごとはない。

入山したハイカーが、もし白骨死体でも見たのなら、届けるだろう。

それから数ヶ月後、その年、また人が入った。今度は四人グループで、原生林見学に来た人達だった。

「あってはならぬことじゃ」

老人は、とびっきり絞り込んだ高い声を出した。四人分のためだろう。

このグループは山頂近くの石の祠も見ている。村人の誰一人見ていないのに。

「あってはならぬことじゃ」

了